

# かぐらおか

## 第 20 号

昭和54年 9月 1日

編集 旭川医科大学  
 厚生補導委員会  
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は山田守英学長)



旭川郷土博物館

### 内 容

これからの旭川医大.....山田 守英... 2	研究室紹介.....寺山 和幸... 6
スエーデン人.....天羽 一夫... 3	昭和54年度通学方法・居住状況について..... 7
第1回卒業式挙行..... 4	入学式挙行..... 8
第5回医大祭..... 5	新入生合同グループ研修..... 8
第5回医大祭総括にかえて.....大学祭 実行委員会... 5	大学院設置..... 8
医学展を振り返って.....塚本 光俊... 6	窓 外.....保坂 明郎... 8



# これからの旭川医大

学長 山田守英

わが旭川医科大学は昭和48年9月に設置されて以来、学年進行により建築と諸機構が逐次拡充整備され、教育、研究、附属病院における診療の3つの体制も整い、本年3月には第1期生が衆目を浴びつつ社会へ進出した。続いて4月には大学院医学研究科が設置され、学生はそれぞれの研究に着手する前提として基本的な学習をはじめている。ここにおいて本学の建設も一応完了し、いわば本学も未熟ながら元服し人並の医科大学となったわけである。

本学は創設当初から建設構想として、単科医科大学という特色を生かし、総合大学では困難とされている一般教育課程と専門教育課程を有機的に連けしめる体系をとり、6年間一貫教育を目標としてきた。すなわちカリキュラム編成において、一般教育科目に基礎教育科目として実験心理学、医療社会学、医学概論などを設け、基礎医学の一部を第2学年から開講し、専門教育科目の中に生物学特論として医用電子、生物物理化学、放射線生物学、発生遺伝学を組み入れ、更に進んでは、分化した専門分野の相互関係を総合する目的で医科学特論、主要疾患総合講義などを設定した。ここに到るまでには幾度か試行錯誤が繰り返されてきたが、今後も時の推移と共に改革されるべきであろう。

医大の機構の中の1体制である附属病院も本年11月には開院3周年を迎えようとしているが、本学では病人中心を第一義として地域医療の実践に直接参画し、同時に学生の臨床実習の場として、重要な役割を果たしている。学生の臨床実習には、関連教育病院も併せて綿密なカリキュラムが編成され、小グループによるマンツウマンの指導がなされ効果を挙げつつあり、更に本年から附属病院は多数の卒業生を擁し、卒後の医師の臨床研修の場としても欠くべからざるものとなっている。また将来は広く医師の生涯教育の場とならなければならない。

以上の大学における医学教育と医療の実践は、大学人の職分として社会に対する重要な義務であって、関係教官は優れた医学教育者であり、優れた医師でなければならない。本学は優れた教官陣を擁し、大学建設の途上の極めて不備な環境のもとで、それをよく克服して教育と診療に尽瘁し多大の成果を挙げつつあることは、自他共に認めるところであって、教官各位の誠意と努力に敬意を表するものである。

医科大学の本来の使命は、医学の対象である人間の生命にかかわる諸現象の知的探究と学問の創造的研究にあ

ることは申すまでもない。大学における研究は、大学人個人の自由発想によって創造されるものであって、他から何の制約も受けるものでもなく、勿論義務もない。ただ医科大学における専門研究は、必ず医学の範疇にその基盤がおかれているという前提でなければならない。研究に自由性があるだけに、その成果は客観的に厳しく評価され、大学人としての資格が問われることも当然である。

本学は今まで建設の途上であって、特に当初は研究室も器械設備等も極めて不備であったのみならず、研究者各自が建設のために全力を傾注しなければならなかったもので、独自の研究を遂行することは極めて困難であったことは否めない事実である。ただこのような不利な条件のもとでも、あらゆる機会をとらえて研究を続け、優秀な成果を挙げていたことも事実であって、これには衷心より敬意を表したい。

本学では夙に建設の基本方針として中央研究組織に力点を置き、相互協力のもとに共同利用のための各種研究器械設備を逐次拡充し、研究遂行に便な環境づくりに努力してきたが、今後は、これらが十分に駆使活用されて、ユニークな優秀な研究が成し遂げられることを期待して止まない。

医学研究は畢竟どの専門においても方法論は生物科学を基盤としているので、研究の上からは、基礎医学と臨床医学の区分はなく、各専門相互の緊密な連携により、更には学際的接点において新しいユニークな研究が展開されるべきではなからうか。

現代医学研究は各専門分野において国際水準でなされ研究を介しての国際交流が盛んになってきた。本学においても既に国際的研究活動がなされつつあるが今後益々拡大することを望むものである。

旭川医大は、今年元服したばかりで、未熟ではあるが、しかし若い深淵とした大学である。勿論歴史は浅く誇るべき伝統もない。しかし過去の建学時代に既に根をおろし培われてきた固有の大学精神は教育・研究・診療の中に生きている筈である。われわれ大学人はこの精神を育て、本学を将来誇り高き伝統をもつ特色ある大学に成長発展させなければならないと思うものである。

昭和54年5月15日、任期満了に伴う学長選挙が行われ山田守英学長が再選された。

(学生課)



# スエーデン人

天羽 一 夫

1968年4月、スエーデンはウメオ大学医学部放射線科の外来で乳癌照射後の患者。「先生診察料は幾らですか」「40クローネですよ」「傷が痛いのですが何か薬を頂けませんか」「よろしい。ではこれを毎日塗ってください。60クローネです」患者は100クローネ支払い、医師は領収書を渡す。次々と患者が来るたびに忽ち医師の白衣のポケットはクローネ札でふくれあがる。傍らでみていた小生「ドクターこれではBMWの新車がもうすぐ買えるね、ところで税金は」「20%だよ」まさにスエーデン医師のベルエポックだった。

1978年12月、同じ診察室で。「先生有難う。ところでこの書類にサインをお願いしますよ」「何だね」「リクセルからタクシーで来たのでサインが要るのです」「いくら保険でタクシーが無料でも、たった100kmだから列車で来なさいよ」「でも列車は数も少いし、腰も痛いしね」「仕様がねいね。リクセルにも病院はあるんだから、今度からはそこへ行きなさいよ」「でもあそこの先生は専門でないからね」かくて患者はタクシー代をせしめ、診察料は病院に20クローネ支払うだけとなり、医師の現金収入は零。「ドクター収入が落ちたね」「そうだよ、それに月給の70%は税金にとられるし。別荘の改造の夢も終りさ」かくて高度福祉社会の影は知識階級、労働者の区別なく忍び寄りある意味では共産主義国よりもっと共産的平等な社会が作られました。職業や年齢による収入差がなくなり、王様も医者も学生もマーケットのパーゲンセルに集ることになります。たしかに王様や医者はその地位と知識に尊敬が払われ収入も多いのですが、尊敬と生活意識は別だとして収入の70%以上の税金を取るのも国民一般の常識的な諒解事項です。しかし必要にせまられての超過勤務に90%の税金がかかるとさすがのスエーデン人も考え込んで仕事をしなくなって、木材、硝子、鉄鋳、自動車などの生産は低下して生活は苦しくなりますが、それではと奥様も働きに出掛け、衣食住の費用を切りつめて頑張り、ときたまの憂さ晴らしに自家製のビールとアクアビットをひっかけるのが楽しみなのも、まことに正直で清潔な国であります。

ウメオ大学の守備範囲は北緯62度から北のスエーデンとノルウェー、対岸のフィンランドのワサ地区を合わせた200万人が対象となっています。開業や往診制度が許可されていないので医師も患者も殆ど全部が大学病院に集ります。ほんの少し条件の良い県に1~2つある地区病院は人気があって就職の競争率は高いそうです。大学

附属病院は一般病床が1,500と他に産科、感染科、精神科の300床が夫々独立病棟として建てられ、すぐに迷子になる長い地下道で連絡され、通路の両側には無駄なく居住区、倉庫、プールなどがとられています。わが放射線科は腫瘍だけの約120の病室を持っています。個室と2、4、6人部屋ですが定員通りに患者の居ることは少なく、大抵は2~3人宛多くつめこまれています。クリスマス、復活祭、夏休みには1つの病棟は完全に閉鎖するし、入院期間も平均1週間と短いので何とか苦情もなく済んでいる様です。放射線科の医師数は約30名で半数宛診断と治療に別けられています。また各々が更に外来、病棟、研究の3班に別けられて3か月毎に交代しています。だから外来や病棟で毎日働く医師の数は少なく、120床の患者を4~5人の医師で切り回しているのですが、矢張り看護婦に相当負担がかかります。しかしそれを事務員、給食、掃除、雑役、付添い、トランスポーター（ベッド運搬人兼庭師）などの多数がカバーしてなかなか合理的に運営されていました。

私が居たのは木造三階のアパートで台所、食堂は共同です。金髪の美人と一緒になので、零下30度のなかを震えながら町までスエーデン語を習いに通った結果はまあまあでしたが女性の生活も垣間見ることができました。私のすぐ前の部屋の26才になる女性は夜勤専門の看護婦で、1カ月に土、日曜の8回とあと2回は病院につとめ、昼間は大学の経済学部に通っているお嬢さんでした。同居している妹さんはノルウェーに近い小さな村の高校を終え、病院でタイピストとして働く傍ら、夜間の看護学校に通っています。看護婦になったあとはもう1度医学部で勉強して女医さんになる積もりとのこと。スムーズにゆけば33才で卒業だと笑っていましたが、一歩ずつ確実に歩む根性と、それを受け入れて可能ならしめる社会が完成していることは福祉政策の反面でもあります。人口僅か3万人と小さいウメオの町で日本人がたった1人で居ますと、マーケット、銀行、警察など日本では縁の薄かった所にも愉快な知り合いが出来ます。マーケットでは衣類や食料品が2割も安くなり、寒いところでの暖い人情は嬉しいものです。日曜日に寝坊していますとスキーに行こうとか、ドライブして飯でも食べようと誘ってくれます。少々お節介なところもありますが、おだてると海苔でも、するめでも食べる気の良い連中でした。

(放射線医学講座 教授)

# 第 1 回卒業式挙行

3月24日(土)午前10時30分から本学体育館において第1回卒業証書授与式が挙行された。父兄・来賓及び教職員約200名が見守る中、学長から卒業生78名1人1人に卒業証書が手渡され、次いで学長から、第1期生のフロンティア精神を讃え今後の研鑽・精進を望み、将来、辺地医療水準向上に直接に寄与するであろうことを期待する旨の告辞が述べられた。

なお昭和54年5月16日付けで発表された第67回医師国家試験の合格率は78%であり、本学卒業生は、73名が合格し、合格率は93.6%であった。これは全国の国立大学で1位、公私立大学を含めて3位の成績であった。

卒業生の動向は次のとおり。(学生課)

## 卒業生の動向一覧

氏名	現住所	連絡先
秋山建児	旭川市豊岡2の2 みずほ荘	内科学第二講座
東 寛	旭川市神居町台場 321-153	大 学 院
磯辺雄二	千葉市亥鼻3-5-10 コーポ亥鼻301	千葉大大学院
岩田光高	旭川市緑が丘5-1-2-28	内科学第二講座
衛藤雅昭	旭川市緑が丘4-4 77R-948	内科学第二講座
大島宏之	釧路市富士見町1-5-19 市立病院アパート	市立釧路総合 病院外科
落合聖二	茨城県真壁郡協和町小栗5616-1	自治医大一般外科
笠茂光範	旭川市豊岡2条3丁目	大 学 院
吉川 潮	神戸市兵庫区永室町1-124-1 三葉荘	神戸大大学院
久保 等	旭川市9条西3丁目 檀上方	皮膚科学講座
日下部芳志	旭川市6条16丁目 ひさご荘8号	皮膚科学講座
佐川 正	旭川市6条16丁目 マンションズ幸102号	大 学 院
佐藤仁志	旭川市神楽岡6条7丁目	内科学第三講座
新ヶ江正	旭川市東光5条5丁目 宮内方	精神医学講座
佐々木正人	旭川市豊岡11の5 広葉マンション	泌尿器科学講座
斉藤聡史	旭川市東光2の2 和光マンション	産婦人科学講座
鈴木 望	旭川市南8条22丁目 美園マンション	脳神経外科学講座
鈴木康沢	静岡県浜松市助信町 319	浜松医大精神医学講座
相馬 彰	旭川市豊岡2条3丁目	産婦人科学講座
竹内 泉	弘前市新寺町 201-134 鏡ヶ池荘2号	弘前大産婦人 科学講座
高木 勇	旭川市7条西3丁目	外科学第二講座
高橋政弘	秋田市手形田中9-16 あかつき荘1号	秋田大外科学 第一講座
豊川好男	札幌市北区北18西4 北18条ハイツ 708号	北海道大 内科学第一講座
内藤義弘	旭川市東光5条5丁目宮内方	耳鼻咽喉科学講座
中畑 久	弘前市新寺町39	弘前大内科学第三講座
梅藤千秋	旭川市東光11条2丁目	内科学第一講座
福田 博	旭川市旭神町1ドームトリ医学荘B-5号	脳神経外科学講座
藤本武利	東京都港区虎ノ門2の2の2 虎の門病院レジデントクォーター	虎の門病院外科
藤原正文	旭川市南3条21丁目 小原方	大 学 院
船井哲雄	旭川市旭町1の9旭町コーポ	外科学第二講座
前田富典	旭川市神楽5の13 大沢十一郎方	外科学第一講座
町田光司	青森県北津軽郡板柳町大町	弘前大内科学第三講座
松岡輝樹	熊本市健軍町山の神3392-13	熊本大小科学講座
宮島洋一	旭川市神楽7-11-481-5 佐藤亮介方	眼科学講座
山本 哲	旭川市永山町8条2丁目 北山方	麻酔学講座
宮本礼子 (旧姓吉木)	札幌市西区8軒9条東3丁目 3-9	北海道大 内科学第二講座
吉田晃敏	旭川市神居2の3ホームバック2F7号	眼科学講座
赤石直之	旭川市東光2の2竹谷アパート	内科学第一講座
安藤政克	旭川市2条20丁目 藪方	大 学 院
五十州京子	東京都文京区本郷5-5 淡路方	東京大皮膚科学講座
石川康朗	東京都中野区野方1-32-1	帝京大循環器内科
印鐘史衛	旭川市神楽1の1 栄雄マンション	小児科学講座
小野 稔	旭川市4条21丁目 誓願寺方	内科学第三講座
小原 剛	旭川市神楽岡3条4丁目	内科学第三講座
大河内博雄	旭川市8条18丁目 三嶋AP	精神医学講座
岡本 洋	札幌市北23西3 ターミナル ハイツ 710	北海道大循環 器内科学講座
沖 潤一	旭川市南8条23丁目	北海道大小児科学講座
加藤淳一	旭川市神楽6条8丁目	内科学第一講座
川村光信	松前郡松前町	東京通信病院
後藤英司	旭川市神楽岡6の5 グリー ンヒル医学荘 313号室	整形外科学講座
佐久間進	旭川市1条11丁目 湊芳治方	小児科学講座
柴田繁男	旭川市4条23丁目坂田アパート	産婦人科学講座
齊藤達也	旭川市緑が丘4-1-1-17	大 学 院
齊藤 真	名古屋市天白区八事音聞山158	名古屋第二赤病院
末松典明	旭川市5条22丁目 沖本アパート	整形外科学講座
鈴木安名	旭川市緑が丘5-4-4-34	大 学 院
千石一雄	旭川市旭神町1ドームトリ医学荘B-3	大 学 院
田中仁史	札幌市豊平区平岸3-5-4 -22平岸グランドビル 603号	北海道大大学院
竹内弘明	埼玉県草加市松江町 271-3	三井記念病院
高中芳弘	千葉県船橋市印内2-7-1	日大内科学講座
千葉 茂	旭川市緑が丘4-1-1-17	大 学 院
鳥羽山滋生	東京都渋谷区代々木 5-64-5 鈴木八重方	東女医大一般 外科
中井啓文	旭川市緑が丘2-4-10-4 加賀谷和方	脳神経外科学講座
永谷照男	東京都品川区東五反田4-7-1 関東通信病院レジデント宿舎内	関東通信病院 レジデント
早坂和正	旭川市東光5の1齊藤マンション3	放射線医学講座
広瀬茂人	札幌市南区澄川4-7-420 藤栄荘3号	北海道大眼科 学講座
藤兼俊明	旭川市宮下通11ヴラロードス	内科学第一講座
二木 源	旭川市南3条25丁目大雪コーポ2階5号	内科学第二講座
別府良男	東京都東村山市富士見町5-9-45	順天堂大研修医
細川誉至雄	札幌市東区伏古9-2-7- 2 田中アパート	北海道勤医協 中央病院
牧野憲一	旭川市神楽4-2 元町ハイツ	脳神経外科学講座

松尾 忍	旭川市東光1条1丁目	皮膚科学講座
松本光博	旭川市神楽6条14丁目 田岡方	皮膚科学講座
八代 均	青森県弘前市大森字勝山 210	弘前大内科学第三講座
安江悠子	兵庫県明石市天文町2-2-37	神戸大麻酔科学講座
山下 泉	旭川市神楽7条9丁目	整形外科講座
横山康弘	旭川市神楽7条13丁目	麻酔学講座
渡辺 信	旭川市神楽岡12の3 小出方	皮膚科学講座

※連絡先欄の病院名・大学名のないものは本学である。  
※卒業生の動向は校友会の資料提供による。

## 第5回医大祭

今年で第5回を迎えた医大祭は6月14日(休)から17日(日)まで開催された。

「新たな模索—確かな伝統を築くために—」をテーマに開催されたこの医大祭は、学生のエネルギーを発揮する場であり、市民と学生との交流を深める場であると共に学術文化活動を発展させる場として位置づけられ、事前の講演会にも力が注がれた。16・17日の一般公開日には約4,800名の市民が詰めかけ、医学展で学生の説明に聞き入り、また模擬店でくつろぐ姿が見られた。

(学生課)

## 第5回医大祭総括にかえて

大学祭実行委員会

6月中旬に催された第5回医大祭は、爽やかな好天に恵まれ延べ4,800余人の市民参加を得て成功のうちに幕を閉じました。

今年は、開学以来初の卒業生を送り出すとともに120名の新入生を迎え入れたこともあって、「道北医療の要」「開かれた大学」として道北の人々の期待を担う本学にとっては新たな転機を迎えた年でもありました。この第2の胎動期とも言うべき局面を迎え医大祭実行委員会では、医大祭に対し如何に取り組むべきかを再三に渡り検討し、48年度開学以来培われてきた本学の伝統をより一層発展・充実し確固たるものとするために、「新たな模索—確かな伝統を築くために—」というスローガンを掲げました。また、医大祭は本学伝統の一翼を担うと同時に、共に学ぶ全学生の要求が反映されたものでなくてはならないとの見解から、次の3点を第5回医大祭方針としました。

1. 学術・文化活動を発展させる。 1. 学生のエネルギーを発揮する場とする。 1. 市民と学生との交流を深める。更に、各学年・クラス及びサークルを援助し実行委員会の強化を計るとともに、自ら企画立案しそれらを成功させることを実行委員会活動方針としました。

医大祭の中心は医学展であることは自明のことですが、1年から5年の参加を得、医療社会学・基礎医学・臨床医学と幅広い分野にわたり総数9つの医学展を催すことができたのは、1つの大きな成果であったと言えます。この医学展の中で、特に1年有志の手による「健康保険制度」の研究発表は、懇切丁寧な説明とその真摯な情熱

が感じられるものであり、市民から感想の手紙が寄せられるなど、今回の医大祭に大きな役割を果たしました。また、医療研・サッカー部の両クラブもそれぞれの特徴を生かし、医学展を通してその和を深めたことは非常に意義深いものであったと考えます。

一方、祭典としての企画に関しては、全学の意見を吸取するために事前にアンケートをとりました。その結果、クラブ関係者、その他の学生の積極的な協力を得、成功のうちに終えることができました。プレ学祭のジャズ研コンサートを初めとし、種々の企画が組まれたわけですが、学内スポーツ大会は学内の交流をより一層深め、オールナイト学祭シネマラソンも今後多くの課題を残したとしても新しい試みとして特筆すべき点であったと考えます。

これら学祭当日の企画を含め、第5回医大祭が学生会活動の一環として果たした成果をまとめると 1. 自主的に学び、その結実を市民に示す形で全学年が医学展に参加し、その和を強めたこと。 1. クラブ・サークルの日常活動の発表の場となり、その集团的和が強められたこと。 1. 企画に協力・参加された教官・事務官との交流が深められたこと。 以上の4点があげられ、この成果は学生の要求に応えた結果であると思います。

しかし、医大祭が5年間の歴史を通じて旭川市民の間に定着し、学生会活動を不動のものとしてきたとしても、いまだ多くの課題が残されています。その今後の課題と



は、 1. マンネリ化しがちな傾向を防ぐこと。 1. 全学生の結集を促し輪を広めること。 1. クラブ・サークルとの協力関係を更に強めるために、クラブ委員会に積極的に働きかけること。 1. 執行委員会・代議員会の学生会としての取り組みを強化すること。 1. 6年の参加を保障すること。 1. 卒業生(研修医)の参加を促すこと。 1. 教官の積極的な参加・協力を促進すること。などが主な点としてあげられます。

これらの課題を解決し、今後更に大きく活発な行事としていくためには、学生ばかりでなく、教官をも含め医大祭を医療・医学教育について考える機会として捉え、多くの大学人が積極的に参加し、質的・量的に拡大・発展させるべきでしょう。そして市民の方々の期待に応えることにより、相乗効果をもって医大祭の新たな進展が得られるものであると確信します。今回の医大祭は、新たな模索を試みる1つの踏台を担ったのではないかと思います。(第5回大学祭実行委員会委員)

## 医学展を振り返って

塚本光俊

僕は今年を含め2度医学展の責任者になったことになる。4年の時は「はしか・三日ばしか」を、今回5年では「産科」をテーマに取り上げた。4年生ではまだ基礎医学が終わったばかりなので、主に細菌学教室、公衆衛生学教室の協力を得て、基礎医学の知識でなんとかできるものを選んだのだ。ところが今回5年生では臨床医学も大分進んだので直接「産科」をテーマに上げた。産婦人科学教室には並み並みならぬ協力をしていた。

去年「はしか・三日ばしか」で三日ばしか（風疹）による先天異常を取り上げたので、今年は更に健康な子供を生むために必要な知識として「産科」を扱うような形になった。展示は模造紙に書いたものを中心にし、スライド、ドップラー胎児心音計、ラットの発生標本など実際に医療の場で使われているもの、一般の人が日常あまり見ることのない顕微鏡などをのぞいてもらった。説明はなるべく平易な言葉に心掛け、専門用語は避けるようにした。ここで公衆衛生の実習で学んだ、模造紙は図解



や表を中心とし、親しみをもたせるためにカラフルなイラストを配し、あとは説明で補うということが役に立った。説明が終わった後でアンケートに記入してもらい来年の参考にした。

今、僕が何故2年も医学展の責任者をしたのかと自問してみると、答えらしきものはこうであった。僕達学生の未熟な知識では確かに医学知識を一般の人に啓蒙するなど思い上がりも甚だしい。でも各学年の力に応じて、または各学年間で協力し合い1つのテーマを勉強し、必要なら各教室の助けを借り、誤った知識だけは話さないように検討し、当日市民の方と説明を通して直接触れ合う場を設ける、我々が医師になる前にこのような機会を通して市民の方と話し合う、こういう経験が大事なのではあるまいかと。医学展はこう考えてくると、勉強した学生だけの自己満足に終わってしまってはならず、市民をある程度は意識したテーマづくりや準備が必要であるといえよう。

(第5学年医学展責任者)

## 研究室紹介

■ 衛生学講座 ■

寺山和幸

当教室が発足したのは昭和50年4月、小生が赴任したのはその1年後であった。当時は実験器具などほとんどそろっておらず、工事現場から大きな竹の子のあき缶を拾ってきて水浴の代用にし、板壁のかけらをコンロ台として実験したことなど、今では懐かしい思い出である。年々器具や設備も充実し、研究体制もほぼ確立したこのごろであるが、振り返れば不自由だった当時の方が現在の何倍もの情熱で研究に打ちこんでいたような気がする。今、この筆をとりながら、初心に返れと自分自身に言い聞かせている。

当教室の研究テーマは①室内空気環境基準に関する研究②環境汚染物質・食品添加物の毒性に関する研究の2つに大別される。

①は北海道教育大学の中田彦彦博士らとの共同研究で行われている。室内空気中の細菌の基準は今日までKochの5分間落下菌法で30個以下という基準値があるに過ぎず、一定容積の空气中に何個以下という定量的な基準値を確立することが望ましい。現在我々はあらかじめほぼ無菌状態にしたモデル実験室で、種々の理化学条件下において数名の被験者を在室させたときの空中細菌、落下菌、床面付着菌の変動を調べ、基準値へのapproachを試みている。

②は実験材料として粘菌を使用しているのがuniqueな点である。近年はバクテリアの変異株を用いて発癌性が論じられているように、バクテリア、ゾウリムシ、テトラヒメナ、ウニ卵などの下等生物の細胞を用いて、種々の薬物の毒性を評価しようとする試みが、いくつかの研究室で行われている。粘菌は他の実験材料に比し、大量培養が容易なこと、運動の観察が容易なこと、細胞膜の電位変化が測定できることなどの利点をもっており、すでに水銀、カドミウム、鉛などの重金属や有機リン系の殺虫剤の急性毒性の発現様式がラットやマウスなどの高等動物におけるものといくつかの類似性のあることがわかった。これを更に発展させて、重金属、農薬、食用色素などの亜急性毒性、慢性毒性を粘菌を用いて調べる試みを行っている。

当教室のスタッフは河原林教授、本間助教授（北大・衛生と兼任）、種市助手、澤山事務官それぞれと小生の5人である。最近当教室は学生の出入りが多く、我々の研究に興味を持たれつつあるのかなど喜んでいて、理由はどうやら年頃の娘が2人いるためらしい。しかし理由の如何にかかわらず、当教室を訪れてくれた学生諸君は歓迎します。まだ当教室を訪れたことのない人、一度遊びに来てみませんか。

(衛生学講座 助手)

# 昭和54年度通学方法・居住状況調査結果について

学生課

## アンケート提出率

昭和54年5月12日現在

学 年	1	2	3	4	5	6	計	大学院
在籍学生数	124(8)	108(16)	108(12)	101(3)	95(8)	92(10)	628(57)	11(0)
アンケート提出数	124(8)	101(15)	81(7)	86(1)	74(6)	53(8)	519(45)	5(0)
提出率 (%)	100	93.5	75.0	85.1	77.8	57.6	82.6	45.5

( ) は女子内数

## 1. 通学方法のまとめ

昭和54年5月12日現在

方法	学 年	1	2	3	4	5	6	計	大学院
徒 歩		38	19	22	17	13	12	121 (22.9) <sup>(%)</sup>	11(0) <sup>(%)</sup>
	任意加入								
自 転 車		26	49	14	19	6	1	115 (21.8)	1 (20)
	任意加入								
バ ス		57	13	10	12	18	6	116 (21.9)	
	任意加入								
バイク			1		2	5	1	9 (1.7)	
	任意加入								
自動車		3	15	24	25	22	24	113 (21.4)	4 (80)
	任意加入								
自動車相乗		3	2	10	15	11	10	51 (9.7)	
	任意加入								
計		127	101	81	90	75	54	528 (100)	5(100)

昭和54年9月8日現在

自動車通学者	7	20	36	38	48	60	209 (33.3) <sup>(%)</sup>	9(81.8) <sup>(%)</sup>
--------	---	----	----	----	----	----	---------------------------	------------------------

(回答率 100%)

## 2. 居住状況のまとめ

昭和54年5月12日現在

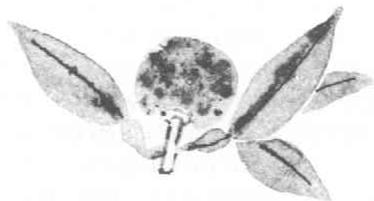
居住状況	学 年	1	2	3	4	5	6	小計	合計	大学院			
自 宅		18	11	11	5	3	7	55	55 (10.6) <sup>(%)</sup>	2			
	親戚又は知人宅	5	1	1	2	1		10	10 (1.9)				
下宿	4.5畳 (2食付)	月額 (料込み)	~30,000	2			2	4	21	291 (56.1)	1		
		月額 (料除く)	~32,500				1	1				2	
		月額 (料込み)	~35,000	3		2	3	8					
		月額 (料除く)	35,001~	1	1			2					
	6畳 (2食付)	月額 (料込み)	~30,000		2			2	256				
		月額 (料除く)	~32,500										
		月額 (料込み)	~35,000	16	34	19	13	9				7	98
		月額 (料除く)	35,001~	21	3	3	6	2				1	36
	8畳 (2食付)	月額 (料込み)	~30,000	2	4	5	2	1	14			10	
		月額 (料除く)	~32,500	6	3		6	1	1				17
		月額 (料込み)	~35,000	8	20	8	4	3	2				45
		月額 (料除く)	35,001~	6		1	2						9
宿	4.5畳 (2食付)	月額 (料込み)	~30,000			1		1	10				
		月額 (料除く)	~32,500	1						1			
	月額 (料込み)	~35,000				3	1	4					
	月額 (料除く)	35,001~	1			2		3					
8畳 (2食付)	月額 (料込み)	~30,000						1	1				
	月額 (料除く)	~32,500											
月額 (料込み)	~35,000				1								
月額 (料除く)	35,001~												

借 入	月 額	8畳 (2食付)		6畳 (2食付)		4.5畳 (2食付)		計	大学院	
		料込み	料除く	料込み	料除く	料込み	料除く			
借 入	~6畳	~10,000		2	1	1		4	14	
		~15,000	3			1	1	5		
		~20,000		1	3			4		
		20,001~					1	1		
	~12畳	~10,000	3	1				2		6
		~15,000		1	1			2		4
		~20,000	2	2		1	2	7		24 (8.7)
		20,001~	3	3				1		7
	~18畳	~10,000						2		2
		~15,000				1	1	2		2
		~20,000			1	1		2		2
		20,001~						1		1
18畳~								0		
アパルト・借家	~6畳	~13,000			1	1		2	5	
		~20,000			2			2		
		~25,000					1	1		1
		25,001~								
	~12畳	~13,000	1	1	2	2	2			8
		~20,000	1	2	2	7	9	1		22
		~25,000	2		2	2				6
		25,001~	3	1						4
	~18畳	~13,000		1	1	1				3
		~20,000	1	1	2	10	6	5		25
		~25,000		1	1	2	1	5		5
		25,001~		2	4		1	1		8
18畳~	~13,000		1				1	2		
	~20,000					1	3	4		
	~25,000					3		3		
	25,001~	1	1	2	1	7	5	17		
道営・市営住宅		1		2		3	6	6 (1.1)		
合 計		124	101	81	86	74	53	519(100)	5	

注 1 通学方法の計については、重複記入のためアンケート提出数と一致しない。

2 ○は1食付1名、◎は1食付2名、●は1食付4名を含む。

3 大学院学生については昭和54年6月1日現在である。



# 入学式挙行

昭和54年度入学式は、4月13日(金)午前10時から本学体育館において挙行された。父兄、教職員約200名が見守る中、緊張した面持ちの119名の新入生は、学長から「6年間では医学の基本を学ぶにすぎないが、将来自信ある医人となるためには大学卒業後も更に研修を続け経験を積み重ね自らも研究して行かなければならない。」旨の励ましを受け目的達成への決意を新たにしていた。

(学生課)

## 新入生合同グループ研修

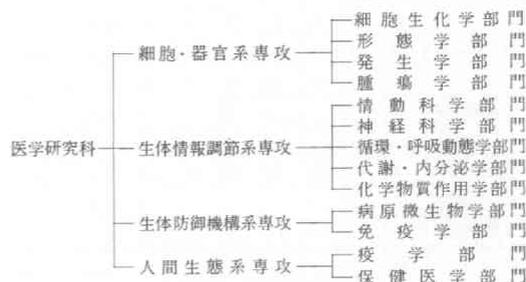
4月21日(土)・22日(日)の2日間にわたり層雲峡温泉ホテル層雲において学生119名、教職員25名が参加し、昭和54年度新入生合同グループ研修が行われた。4月とは言えまだ肌寒く、流星の滝・銀河の滝も凍結していたが、参加者は隣人紹介、懇親会、レクリエーションを通じて親睦を深めていた。

(学生課)

# 大学院設置

本学大学院(医学研究科・博士課程)は、昭和54年4月1日に関係法令の改正を経て設置された。入学選抜の学力検査は4月16日本学で行われ、同月19日合格者6名を発表、28日に入学者6名(5月29日に5名を加え現在11名)をもって授業が開始された。組織構成は、学際的領域の研究を推進するために研究方法論と学問体系を反映して下図のとおり4専攻13部門となっている。

(学生課)



## 窓外

保坂明郎

—「におい」雑感—

長年眼科医をやっているせいか、それとも本来そうなのか自分にはわからないが、「におい」(かおりという言葉にぴったりのことは残念ながら稀である)には至って敏感である。大きい講堂などでは大分緩和されるが、数十人程度の教室に入る時には諸々雑多な臭気で時には気分が悪くなることもある。小学生は講演の経験しかないが、ほこりくさいだけのようである。無給時代のアルバイトを含めると中学生、高校生、看護学生、大学生とすべて経験しているが、生物学的なおいには女子高校生あたりがもっとも強く、それ以上では化粧品とミックスされるのでぼやけてしまう。男子ではこういうピークはなく、汗と脂つまり不潔さの程度に比例しているらしく思われる。講堂に立ちこめた紫煙は論外である。

患者さんでは予診のための明室で向かいあっただけで特有の臭気が診断の助けになることがある。もちろんそれは眼の病気ではないので診断学実習の楽しみとして答は出さないでおく。われわれ眼科医がもっともおいを感じるのは暗室で直像鏡検査を行う場合である。講

義の時に何時も強調するように右眼は右眼で、左眼は左眼で検査するというのは本来失礼な接触事故を起こさないための配慮であるが、多少は当方の防衛の意味も含まれているわけである。部位から言えば、腋窩から頭部までの範囲に発するにおいであろうが、鼻腔・口腔からのものが主体と思われる。各論は差し触りがあるので止めにして、今、疑問に思っていることを2つ挙げておく。乳離れした頃の子供と70才以上の老人とが多少酸性の似かよったにおいのあること、妙令の女子に、時たま腐敗臭のあること、である。

においに限らないが感覚というものは或る程度は相対的であり慣れの現象がある。幸いなことに日本人は割に体臭の少ない種族であると思うが、他民族からみると反対なかも知れない。こういうことは余程親しくなければ言ってくれないから、外国人の意見を聞いてみたいと思っている。黒人はわれわれからすると、白人とは違ったかなり強烈なおいがあるが、2~3箇月もすると慣れてしまっ、ゴーパーなどという踊りは、あの赤道直下の熱気と、彼等のむんむんする体臭なしにはどうもぴんと来ないから不思議である。

敬遠されると困るので断っておくが、診療の時にいちいちにおいを気にしているわけではない。ただ医師というものは、頭につめこんだ知識や経験はもちろん、鋭敏に研ぎすました感覚までもすべて動員して患者の診察に当るべきものだということを言いたいのである。ところで筆者を含めて患者を診る側はどうなのか—そうです。二日酔であったり、微マンでぼうっとしていたりでは臭気はもちろん、どだい臨床実習など問題外なのである。

(眼科学講座 教授)